

スタンダー
バルムの僧院
恋愛論

41

世界文学全集

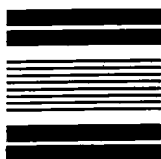
41

河合文房

パルムの僧院 恋愛論

河出書房

© 1969



カラー版 世界文学全集 第41巻

スタンダール バルムの僧院 恋愛論

昭和44年8月25日初版印刷

昭和44年8月30日初版発行

訳者 生島遼一
鈴木昭一郎

定価750円

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

印刷者 澤村嘉一

印刷 凸版印刷株式会社

製本・加藤製本株式会社

製函・加藤製函印刷株式会社

本文用紙・三菱製紙株式会社

表紙・日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町3の6

電話 東京(292)3711(大代表)・振替口座 東京 10802

目 次

スタンダード

解 説	年 表	訳 注	恋 愛 論	パ ル ム の 僧 院
471	466	444	293	3

巻頭口絵 領事服を着たスタンダール

本文カラーさし絵

V. フルキエ

(エッチング G. メルシエ)

(彩色 渡辺栄子)

コレッジオ

装 幀 亀倉雄策

パ
ル
ム
の
僧
院

生
島
遼
一
訳

主要人物

ファブリス・ヴァルセルラ 本編の主人公、大貴族デル・ドンゴ家の次男、ナポレオン崇拜のあげく、ワテルロー戦に馳せ参じる。

デル・ドンゴ侯爵 ファブリスの父、ミラノの富裕な貴族で、頑迷な旧思想の持ち主。

サンセヴェリナ夫人 ファブリスの叔母、甥に宿命的な情熱を寄せる。最初の夫ビエトラネーラ伯を失い、後バルムのサンセヴェリナ・タクシス公と形式上の結婚をする。

エルネスト四世 バルム公国の専制君主。

モスカ伯 バルムの陸軍、警察、財政を兼ねる大臣。

ラヴェルシ侯爵 モスカ伯と反目するバルムの政党の首領。

ファビオ・コンチ バルム大公殿下の侍従長。

クレリア・コンチ その美しい令嬢。

ビンデル男爵 ミラノの警視総監。

マリエッタ・ヴァルセルラ 旅廻りの一座の若い女優、ファブリスを慕う。

読者への言葉

この小説が書かれたのは、一八三〇年の冬、パリから三百里離れたところである。したがって一八三九年の事がらすこしも諷するものではない。

一八三〇年より幾年も前、われらの軍隊がヨーロッパを駆けめぐっていたころ、偶然わたしはひとりの司教会員の家に宿舎をわりあてられた。それはイタリアの美しい町バドヴァにおいてであった。滞在が長びいたので、わたしたちは親しくなった。

一八三〇年の末ごろ、ふたたびバドヴァを通ったので、わたしはすぐかの親戚な司教会員の家に行った。この人はもう生きていなかった。わたしはそれを知っていたのだが、あんなに愉快な宵々をすごし、その後たびたびなつかしがったこの家の客間をもちど見たかった。司教会員の甥とその人の妻がいて、わたしを旧友のようにむかえてくれた。数人の客もまたまた来た。わかれたのは夜ふけだった。甥はカフェ・ペドロッティからおいしい *zandaton* (一種の飲料) をとりよせてくれた。とくにそんなに夜ふかしをしたのは、だれかがふと話題にしたサンセヴェリナ公爵夫人の物語のためだ。甥はわたしのためにその話を全部語ってきかせた。わたしはみんなにいった。

「これからわたしの行く国でこのような夜はまたないでしょう。だから、そういう夜の長い時間をつぶすために、ただいまの物語を小説にしてみましよう」

「それなら——」と、甥がいう。「伯父の年鑑をさしあげます。それ

のバルムの項に、公爵夫人があそこ思いのままの生活をしていたこの宮廷の裏面状況がすこし記してありますから。でも、ご注意ください！ この話はけっして道徳的なものではありませんよ。このごろのようにフランスで福音書的な純潔が誇られているさい、あんな話を書くど、あなたは極悪人のようにいわれるかもしれない」

わたしはこの小説を一八三〇年の原稿にすこしの修正もくわえず発刊する。そこで二つの不都合が予想される。

ひとつは、読者のためのものだ。人物がイタリア人だから読者の興味は薄いだらうということ。この国の人の心はフランス人の心とかなりちがっている。イタリア人は正直で、善良で、びくびくしないから、考えていることをいう。彼らが虚栄心をもつのはただ発作的にのみである。そういうときにはそれも情熱となつて、*passio* と呼ばれる。最後に貧乏はこの人たちのあいだでは滑稽ではない。

第二の不都合は作者に関することだ。告白するが、わたしは大胆にも人物に性格の峻烈さをそのままのこしておいた。が、そのかわり声を高くして明言するが、彼らの行為の多くにわたしは最も道徳的な非難をあびせる。彼らにフランス人の性格の高い倫理性や優雅をあたえたとして、それがなんになるだろうか。フランス人はなによりも金を愛し、憎悪や愛から罪をおかすことはまれである。それにまた、南から北へ二百里すむごとに、新しい景色があつていいように、新しい小説があつていいはずだとわたしには思われる。司教会員の愛想のいい姪はサンセヴェリナ公爵夫人を知り、たいそう愛してさえた。そして、夫人の行状は非難すべきものだが、それを変えないでほしいとわたしにたのんだ。

一八三九年一月二十三日

一七九六年のミラノ軍は赤い制服を着た二十四人のやくざ男が組織し、これがりっぱなハンガリア擲弾兵の四個連隊と協力して都市を守っていた。風紀はまことに放縱で、しかも熱情ははなはだ稀薄であった。とにかく、いっさいなんでも坊さんに白状しなければ現世でさえうかばぬという不愉快にくわえて、当時の善良なミラノ市民はこれまた人困らせな君主制のこまごました束縛をまだうけていた。たとえば、ミラノで従兄の皇帝の代理として統治していた大公は、小麦の売買でひともうけることを思いついた。その結果、殿下の穀倉がいっぱいに満たされるまで農民は穀物の売却を禁じられていた。

一七九六年五月、フランス軍入市三日後のことだ。すこし狂人じみた男で、のちに有名になったが、グロという若い細密画家が軍隊といっしょにこの町へ来て、(當時流行の)「ヘルヴィン」という大きなカフェでこの肥満した大公のやりくちを聞いた。さっそく彼は汚ない黄色の紙に刷ったアイスクリームの表をとり、その裏へ太っちょの大公を描いた。一人のフランス兵がその腹を銃剣で突く、すると血は出ずに小麦が思いもかけぬ多量に飛び出すといった図だ。冗談とか漫画といったものはこの疑いぶかい専制王国でおよそ縁遠いものだったから、このカフェ「ヘルヴィン」の卓上におき忘れたグロの絵はまさに天から降った奇跡のようなものに見えて、その夜さっそく印刷され、翌日は二万枚を売りつくした。

ちょうど同じ日、六百万の戦費賠償金の告示が出た。これはフランス軍の欠乏をおきなうために課されるので、六つの戦勝をえ、二十の地方を征服してきた軍隊は、ただ靴、ズボン、上衣、帽子に事欠いていたのだ。

こんなに貧乏なフランス軍とともに、ロンバルディアにどつと流れこんできた幸福と歓喜は、また非常なものだ。六百万の賠償金やそれにつづいた各種の要求を重荷と感じたのは、僧侶連中と二、三の貴族だけであった。フランスの兵士は一日じゅう笑ったり歌ったりしていた。みんな二十五歳以下で、二十七歳の司令官が彼らの最年長者とさ

れていた。その陽気、若さ、無頓着ぶりは、坊さんたちの怒りをふくんだ説教とじつに愉快な対照をなしていた。坊さん連は六か月以来神聖な説教壇の上から、フランス人というやつは、自分が殺されそうだから、すべてを焼きはらい世界じゅうの人間をみな殺しにすることを強いられている悪魔だ。だからどの連隊も断頭台を先頭に立てて進軍する、などと説いていた。

田舎ではフランス兵が百姓家の門前で、その家の主婦の赤ん坊を揺すりつつお守りをしたり、ほとんど毎晩のようにだれか鼓手がヴァイオリンをひいて即席舞踏会をひらいているのが見られた。もちろんコントル・ダンスなど、兵隊たちにはあまり専門的で複雑だし、そんなものをわきまえていない連中だから、土地の女たちに教えてやるわけにもゆかず、女たちのほうから「モンフェリーナ」とか「サルテルロ」とかそのほかイタリア風の踊りをこの若いフランス兵たちに教えてやるのだ。

士官たちは、できるだけ富裕な家庭を宿舎に割りあてられていた。大いに英気を養わねばならぬ。たとえば、ロベールという中尉などは、デル・ドンゴ侯爵夫人邸の宿舍割当券を手に入れた。この若い士官は、徴発のほうではなかなか辣腕家だが、それでもこの邸へ入るときに全財産として、ピアチェンツァでもらった六フラン一枚しか持っていなかった。ロジ橋通過ののち、弾丸でやられて死んでいたりっぱなオーストリア士官から、新調のりっぱな黄色南京木綿のズボンをまきあげた。これほど衣類がいいおりにうまく手に入ったことはない。彼の士官肩章は羊毛製だし、上衣の布地ははずたずたになったのがはなれぬよう袖の裏で縫いつけてある。さてもっとなさないこと、それは靴の底がこれまたロジ橋の向こうの戦場で拾った帽子の切れっぱしで作ってあることだ。この即製靴底がひどく目だつ紐で靴の上がわに結びつけてあるので、邸の食膳係長がロベール中尉の部屋へやってきて、どうか侯爵夫人と晚餐をいっしょにといったときには、中尉はじつに苦しい当惑に陥ってしまった。部下と二人で上衣を少々縫いな

おしたり、靴の上に立たやつかない紐をインクで黒く染めなおしたりして、その致命的な晚餐までの二時間をすごした。ついに恐ろしい時がやってきた。「一生のうちに、あれほど困ったことはなかったぜ」とロベール中尉はよくわたくしにいったものである。「婦人たちのほうじゃ、ぼくがなにかこわいことでもしそうに心配しているし、こちらはまたそれよりもっとびくびくものだったのさ。ぼくはじっと自分の靴ばかり見つめながら、どうすればちつとは上品に歩けるか、それがわからんのだ。そのうえ、デル・ドンゴ侯爵夫人といえど」と、彼は語りつづける。「当時はもう美しい盛りであつたよ。あんなに目が美しく天使のようなやさしさをたたえて、濃いブロンドのきれいな髪があの魅力ある顔をうりさね顔にくっきりうかびあがらしている様子はきみもよく知っているはずだ。ぼくの部屋にはあの女の肖像かと思えるようなレオナルド・ダ・ヴィンチのヘロディアスの像がかけてあつた。ありがたひことは、ぼくはその超自然的な美にうたれて、自分の服装のことなど忘れてしまつた。なにしろ、それまで二年間というものは、ジェノアの山中で、ただ醜いもの、みじめなものしか見ていなかったのだからね。ぼくは黙っていられなくて、自分が美しさに恍惚とした気持ちをするばかりだったものだ。

だが、そう無分別にいつまでもそんなお世辞をつづけていたわけじゃない。ぼくは、自分のことをいろいろな工夫しながら大理石づくめの食堂の中にいる十二人ばかりの従僕や給仕に目をやつた。それがまたそのときのぼくには、じつに壮麗をきわめた衣装を身につけていると見えたものだ。まあ考えてみてくれたまえ、やつらはりつぱな靴をはいていることはもちろん、銀の留め金さえつけている。ぼくはこの連中が、こちらの軍服はいうまでもなく、おそらく靴の上までもじろじろ見ているにちがいないことをちゃんと横目にらみながら感じていたから、そのつらかったこと。もちろんぼくは、一言でもつてこういう連中を憐れあがらせることはできたらうさ。しかし、ご婦人たちをこわがらせずにやつらをちゃんとさせるには、いったいどうすれば

いいか？ 侯爵夫人はその後たびたびぼくにくりかえしていたように、すこしでも心丈夫なようにというので、夫の妹、ジーナ・デル・ドンゴ嬢を当時いた修道院から呼びよせていたのだ。この夫の妹というひとが、のちにあの美しいピエトラネーラ伯爵夫人となつたひとで、逆境にあつてその勇氣と心の明朗さでだれもおよばなかつたように、幸運などときにはまたそのときで、だれしもその快活さと愛すべき機知にはかなわないという女だつた。

ジーナは当時十三くらいだったろうが、それがきみも知っているとおり、いきいきとして率直で、まるで十八くらいかとも見えた。この女もぼくの服装を前にしてはついふきだしたくなるのを心配したのか、すこしものを食おうとしなかった。いっぽう侯爵夫人は、またこれとは反対に、いやに窮屈な礼儀正しきでぼくを閉口させる。夫人はちゃんとぼくの目の中にいらいらした気持ちを見てとつていたにちがいない。要するにぼくはおよそ間の抜けた顔をしていたわけで、これはフランス人にはとてもできないことだというのが、他人の軽蔑をじつとがまんしていたのだ。だが、ふと天来の思いつきがうかんできた。――ぼくは列席の婦人たちへ自分のなめたみじめな経験を話し、ばか老將軍たちが二時間にわたつてぼくたちを閉じこめておいたジェノア地方の山中で苦しんだ話をして聞かせたんだ。――（「あちらでは」と、ぼくはいいだした。――（あの国に通用もしない不換紙幣をくれますし、それはいいから一日三オンスのパンきりでした。こんなことを二分間と話さないうちに、人のいい侯爵夫人は目いっぱい涙をため、ジーナはひどく真剣な顔つきになつてきて、

（まあ、中尉さん、三オンスのパンですつて？）という。

（そうですとも、お嬢さん。そのかわり、その配給が一週間に三度も欠けるのです。しかもぼくたちの泊まっていた家の百姓たちとなるを、ぼくたちよりはるかにみじめだったもんですから、こちらのパンを、すこしずつわけてやっていた始末でした）

さて、いよいよ晚餐が終つて、ぼくは侯爵夫人に腕をかしてサロ

ンの入り口まで来たが、そこで急に踵を返すと、食卓の世話をしてくれた給仕へ、当時一枚しか持っていなかった六フランの貨幣をばいどくれてやった。この金の使いみちについて、ずいぶんいろいろ空想していたんだが」

「一週間もたつて」と、ロベールはまたつづける。「フランス軍が、だれひとり断頭台になんかかけないことがわかると、デル・ドンゴ侯爵はコモ湖畔にあるグリアンタの城館から帰ってきた。このひとはフランス軍の近づくとともに、若く美しい妻と妹を戦争の渦中にのこしたまま、勇敢にもそこへ避難していったわけなんだ。侯爵のわれわれにいだく憎悪は、まずその恐怖感と同程度で、つまり際限なしといっている。このひとがとくにうやうやしくしてくれるときの、その蒼ざめた敬虔（けいけん）そうな顔は、なかなか見ておもしろかった。ミラノへ彼が帰ってきた翌日、ぼくは六百万フランの賠償金の分配として、三オースの羅紗（ろしゃ）地と二百フランの金をうけとった。——これでぼくもやつと立ち直れたわけで、もう舞踏会もはじまっていたから、ここの婦人がたのお相手役になってしまったわけだ」

このロベール中尉の物語は、ほとんどそのままフランス兵すべての物語でもあった。人々はこういう善良な兵士たちの貧しさを軽蔑するどころか、それに同情し、彼らを愛した。

だが、このふいに来た幸福と陶醉の時期はほんの二年ばかりしかつづかなかつた。そのあいだの狂乱はあまりにもはげしく、あまりにも広範囲にわたっていて、その概況をつたえることすらわたしにはできない。この民衆は百年このかた倦怠に苦しんでいたのだという、深遠な歴史的考察ではのめかすほかはない。

ヴィスコンチ家やスフォルツァ家といった有名なミラノ大公の宮廷には、南国特有の逸楽が支配していたのだが、一六二四年スペイン軍がミラノ人を征服し、寡黙（こくもく）で猜疑（さいぎ）ぶかく、自尊心つよくいつも反乱を恐れているといった主権者として支配しはじめて以来、陽気さが消えた。民衆は彼らの君主たちの風習をまね、現在を享樂するよりもむしろ

短剣をふりまわして、とるにたらぬ侮辱に復讐することばかり考えるようになった。

一七九六年五月十五日にフランス軍がミラノに入ってから、一七九九年四月カッパノの戦いの結果追っぱられるまで、狂気じみた歓喜や、快活と官能の楽しみがはなはだしかったこと、あらゆる陰鬱な感情、ただもう分別くさくなることさえも忘れられたことの証拠に、この期間には、陰気くさい顔をやめ、金儲けのことを忘れてしまった老千万長者、老金貸、老公証人たちを指摘できるほどだ。

せいぜい、こういう一般人の快活さと民衆の心の明るい喜びに、氣をわくるくしたとでもいうように、その田舎の館に避難していた幾家族かの貴族を数えることはできた。また、こういう富豪貴族たちはフランス軍の要求した戦費賠償金の割当のとき、遺憾な態度をとって目だっていたことも事実だ。

デル・ドンゴ侯爵はこんなに陽気な世相にふきげんになって、コモ湖のかなたグリアンタの壮麗な館へまっさきに帰ってしまった一人だった。ここへ婦人たちはロベール中尉をつれて行った。その館はおそらく世界に類のない位置をしめ、あのすばらしい湖水から百五十尺ほど上の高台に建てられ、湖水の大半を見おろしている。かつては城塞であった。デル・ドンゴ家が十五世紀に建築したもので、そのことはほうぼうの紋章入りの大理石が証明している。いまでも翻転橋もあれば、すでに涸（かわ）れてはいるが深い溝渠もあり、ことに、高さ八十尺、厚さ六尺の城壁をめぐらしているこの館は、ふいの襲撃にあつてもまず大丈夫だ。猜疑心の深い侯爵の氣にいらっていたのはそのためだ。平生口ぎたなく叱りつけるばかりで話したことがないからみなおのれに忠実なやつと想像している三十人たらずの従僕にここでとりまかれていれば、彼はミラノにいるほど恐怖に責められることはなかったわけだ。

それほど恐怖をいだくのも、まったく理由のないわけではなかった。侯爵はグリアンタから三里離れたスイス国境へ、戦場の捕虜を逃

亡させるためにオーストリア政府から派遣されてきている間諜と、たえず通信していたからで、もしこれが発見されると、フランス軍將軍たちから重大視されたに相違ないのだ。

侯爵は若い妻をミラノに残しておいた。夫人は家庭の用事をしたり、この地方のいいならわしのヘカーサ・デル・ドンゴに課せられた賠償金を支払う役までうけもたされていた。夫人は、その金額を減らしたいとつとめていたので、そのためには公職についている貴族たちや、ときには貴族でない有力筋にも会わなければならない。ちょうどそこへ一家の重大事件が突発した。侯爵は妹のジーナを非常に富裕で名門の一人物と結婚せよと手はずがしてあったのだったが、それが頭に髪粉をつける男だった。そのためにジーナはこの男に会うとき、きやっきやと笑ってしまう。そしてまもなく、ビエトラネーラ伯爵と結婚するなどというばかなことをしてかしてしまった。もちろん伯爵はなほだ人のいい貴族で風采もりっぱだったが、父子あいついで破産し、しかも最もいけないのは、新思想の熱烈な身方だったことだ。ビエトラネーラは、イタリア国民軍少尉だったが、これがまた侯爵をいよいよがっかりさせてしまった。

こうした熱狂と幸福の二年間がすぎると、バリの執政官政府は、權威の確立した君主づらをして、すべて凡庸でないものにはげしい憎惡を示しはじめた。政府からイタリア軍に派遣した無能な將軍たちは、二年前アルコレやロナートの異常な勝利をえたこの同じヴェロナの平原で、あいついで敗北した。オーストリア軍はまたミラノに迫ってきた。当時大隊長となつてカッサノの戦いに負傷していたロベール中尉は、その友デル・ドンゴ侯爵夫人邸へこれが最後というので泊りにきた。別離は悲しかった。ロベールはノヴィへ退却するフランス軍について行くビエトラネーラ伯爵とともに出発した。若い伯爵夫人は、兄がその遺産の分け前を拒んだので、荷馬車に乗って軍隊のあとについていった。

こうしてまた、ミラノ人が「Erechi. Rea」(十三か月)と呼ぶ、反動

と旧思想への復讐の時代がはじまった。こう呼ぶのはさいわいこの愚劣への復讐が、マレンゴの戦いまで、十三か月しかつづかなかつたからである。旧式で信心深く陰気なすべてのものが再びあらゆることを支配しはじめ、社会の指導権をもつにいたつた。まもなく保守主義に忠実だった連中は、ナポレオンがそうなる資格がじゅうぶんあつたごとく、エジプトでモメルク人に絞殺されたと村々に発表した。

自分の領地にのがれて仏頂面をしていて、復讐の念に燃えつつ帰ってきた連中のうちでも、デル・ドンゴ侯爵は、その怒りでは目だつていた。彼の大げさな憤激は、しぜん彼をその一派の首領に祭りあげていた。恐怖をいだいていないときにはたいへんいいのだが、いつもびくびくしているこういう紳士たちは、ついにオーストリア司令官をうまく籠絡した。このまた司令官がごくおめでたい人物で、苛酷なやりかたが高等政策であると説きふせられ、百五十名の愛国者を捕縛させてしまった。この人々が当時のイタリアにいた一番ましな人間だったのだ。

やがて彼らはヘカッタロの河口へ流刑におくられ、地下の洞穴へ投げこまれた。湿気と、ことにパンの欠乏は、こういう悪党たちに適切で迅速な裁きを行なった。

デル・ドンゴ侯爵は重要な地位についた。侯爵は他のさまさまの立派な性質にくわえて、はげしい吝嗇をかねそなえていたから、妹ビエトラネーラ伯爵夫人には一エキュの金も送つてやらぬということを誇らしげに公言していた。妹のほうは、いつまでも恋に夢中で、夫から離れたがらず、いずれはフランスで夫とともに餓死しかけている。やさしい侯爵夫人は気がでならなかった。とうとう自分の手箱の中から、小さなダイヤをいくつかこっそり抜きとることに成功した。この箱は毎晩夫が取り上げて、寝床の下鉄箱の中へしまひこんでしまふのだ。侯爵夫人は、持参金として八十万フランを夫のところへ持つてきていたが、小遣として毎月八十万フランずつもらっている。フランス軍がミラノの外にすごしていた十三か月間、このひどく内気な夫人は、

いろいろの口実をつくって、ずっと喪服ばかり着とおしたものだ。

われわれの主人公の物語をはじめるにあたって、多くのきまじめな作家たちの手法にならない、まずその出生一年前から説き起こしたことを、作者は告白する。この主要人物というのは、ミラノでデル・ドンゴ侯爵と呼んでいるファブリス・ヴァルセルラその人にはかならない。彼はちょうどフランス軍が撃退されているときにこの世に生まれ、偶然にも、大貴族デル・ドンゴ侯爵の次男となったのである。父侯爵の蒼白い大きな顔や、意地の悪そうな微笑や、新思想にたいするかぎりない憎悪のことはすでに読者が知っておられる。一家の全財産は、父に生き写しの長子アスカニオ・デル・ドンゴに譲られることになってきた。この兄が八歳、ファブリスが二歳のときのことである。家がらのいい人たちがみなもうとくに絞殺されたものと信じていたポナバルト將軍が、突如としてサン・ベルナル山をくだってきた。そしてミラノに入城した。これまた史上類をみない一瞬であった。全民衆がいかに熱狂したか、想像していただきたい。その後、幾日もたたぬうちにナポレオンは、マレンゴの戦いに勝った。その余のことはいうまでもない。ミラノ人の陶醉は絶頂に達した。が、こんどの陶醉には復讐の念がまじっていた。この善良な民衆は憎悪ということを教えられていたからだ。やがてカッタロの河口に流されていた愛国者たちのうちの生きのこりが帰ってきた。彼らの帰国は、国民的祭典をもって祝われた。その蒼白な顔、驚いたような大きな目、やせた手足などは四方八方に爆発していた歓喜と、奇異な対照をなしていた。彼らの到着は、最も危険な立場にいる家族たちの、出発の合図でもあった。デル・ドンゴ侯爵はまっさきにグリアンタの城館へ逃げた一人だ。大貴族の家長たちは、憎悪と恐怖でいっぱいだった。しかし、夫人や令嬢たちは、フランス軍の最初の滞在当時の歓喜を思い出してミラノが去りがたく、またマレンゴの戦いのすぐあとにヘカザ・タンツィンで催された陽気な舞踏会に心を残していた。戦勝後まもなく、ロンバルディア地方の治安維持の任にあたったフランス將軍は、貴

族の小作人たちや田舎の老婆たちが、イタリアの運命を変え、一日のうちに十三か所の要塞を征服したマレンゴの驚くべき勝利などで念頭になく、ただブレッシア第一の守護神サン・ジョヴィタの予言ばかり気にしていることを知った。その神聖なおことばによると、ナポレオンとフランス軍の隆盛は、マレンゴの戦いののちちょうど十三週間めに終わるという。デル・ドンゴ侯爵その他、地方の不平家貴族たちの態度を少々弁明するのは、彼らはけっして冗談でなく、実際にこの予言を信じていたことだ。こうした連中は、一生のうちに書物を四冊と読んだことがない。十三週間めにはミラノへ帰るのだと、公然とその準備をととのえてさえた。しかし、時がたつにつれて、フランスのために新しい成功をしるして行くばかりだった。ナポレオンはパリに帰ると、賢明な法令を出して、彼がマレンゴの一戦で外敵から革命を救ったように、国内の革命を未然に救った。そこで、自分の館に逃げていたロンバルディアの貴族たちは、はじめてブレッシアの氏神様の予言を誤解していたことをさとった。それは、十三週間じゃなくて、十三か月だったのだ。十三か月は経過した。そしてフランスの隆盛は、日に日に増大するばかりと見えた。

一八〇〇年から一八一〇年にいたる進歩と幸福の十年間については簡単な記述にとどめておく。ファブリスは、その少年時代をグリアンタの館で、村の百姓の子供たちにまじって、ぶんなぐりっこをしながらすごしつ、何ひとつ覚えず読むことすら字ばなかった。その後、ミラノのジェズエイト派の学校に送られた。父侯爵はこの子がラテン語を習うにしても、つねに共和政治ばかりを説くあの古代作家の書いたものによらず、十七世紀の美術家たちの傑作たる挿絵が百枚以上も入っている豪華な書物によって教えてもらいたいと強く要求した。その書物というのは、バルムの大司教ファブリス・デル・ドンゴが一六五〇年に出版したデル・ドンゴ侯爵ヴァルセルラ家のラテン語で書かれた系譜であった。代々のヴァルセルラたちは武人が多かったから、版面は多く戦争画で、どれもみなその家名の英雄が剣をふりまわ

しているところだった。この書物はたいそうファブリス少年を喜ばし
た。この子がかわいくてならない母は、ときどき許しをえて、ミラノ
へわが子に会いにきたが、夫は妻の旅費いっさいを出してくれないの
で、夫人はいつも義妹の美しいビエトラネーラ伯爵夫人から借りてき
た。伯爵夫人は、フランス軍の帰着後はイタリア副王ユージェーヌ公の
宮廷の最もはなやかな婦人の一人となっていた。

ファブリスが初聖体拝受をすまずと、夫人はあいかわらず好きこの
んで譚居生活をしている侯爵にたのんで、ときどきは子供を学校から
帰らせるようにしていた。この子はふうがわりで、機知もあり、たい
そうきまじめだけれど、美少年だし、一流社交界の婦人のサロンへ出
てもおかしくはあるまいと思った。それはともかくじつに無知で、文
字の書きようもほとんど知らないのだ。なにごとに、その熱情的な
性格をはたらかせる叔母の伯爵夫人は、もし甥のファブリスが、おど
ろくほど進歩をし、学年の終わりにたくさん賞をもらうようだった
ら、いろいろあなたのためにお力になりましよう、校長に約束し
た。そうして、そういうりっぱな成績を上げさせるために、毎土曜日の
夜彼を呼びよせ、学校へは水曜日も土曜日もならなければ帰さない
こともたびたびだった。ジェズエイト派の僧侶たちは、副王の公爵
からはたいせつにされていたが、王国の法律によつてイタリアから排
斥されていた。で、ぬけめのないこの学校の校長は、宮廷のこの有力
な婦人と仲よくしておけばどんな利益がえられるかをよく心得てい
た。彼はファブリスがいくら欠席してもけつして不平をいわず、前よ
りいっそう無知だったのに、その学年末に少年は五つの一等賞をもら
った。そこで華美な伯爵夫人は、近衛師団長だった夫と、副王宮廷の
最も著名な五、六人を従えて、ジェズエイト派学校の賞品授与式に
列席した。校長は、その上役たちから称賛を博した。

伯爵夫人は社交的だったユージェーヌ公のあまりにも短い統治中たび
たびひらかれた壮麗な饗宴に、欠かさずその甥をつれて行った。彼女
は自分の勢力を利用して彼を輕騎兵の士官にしたので、十二歳のファ

ブリスはその制服を身につけた。ある日そのかわいい姿に有頂天にな
った伯爵夫人は、彼にお小姓の役目を与えてほしいと公に願ひ出た。
これは、デル・ドンゴ一門がこの宮廷の身方になることを意味する。

さてその翌日になると、彼女は副王にそういう願ひ出をすっかり忘れ
ていただきたいと必死にたのまねばならなかった。この願ひがかなう
には、ただもう未来のお小姓の父の同意さえあればよかったが、それ
が目だつようにきつぱり拒絶されるにきまっていたからだ。こんなと
つびな思ひつきは侯爵を戦慄させ、それを口実にファブリスをグリア
ンタへ呼びもどした。伯爵夫人は兄をすっかり輕蔑していた。陰気な
愚物で、権力でもてば、どんな意地悪い人間になるかわからないと
思った。だが、彼女はファブリスに夢中だったので、十年間ひと言も
いってやらない沈黙をやぶつて、甥をもちど帰してくれという手紙
を書いた。それにはなんの返事もなかった。

彼の祖先たちのうちで最も尚武的な人々の手でつくられたこのいか
めしい館にもどつてきたファブリスは、およそ知っていることといえ
ば教練と乗馬だけであつた。ビエトラネーラ伯爵もその妻と同様この
少年が大好きで、たびたび馬に乗せ、ともに練兵につれて行つたりし
ていたからだ。

グリアンタの館に着いたとき、叔母の美しいサロンと別れるときに
流した涙で、まだ目をまっかに泣きかはらしていたファブリスは、ただ
母と姉妹たちの愛撫を見いだしただけだった。父侯爵は長男のアスカ
ニオ小侯爵と二人きりで書斎に閉じこもっている。二人はその部屋
で、ウィーンへ送られる名譽をもつ暗号文書を作成しているので、父
と子は食事のときでなければ姿を見せなかった。侯爵は、各領地から
上る収入の複式簿記の記入を相続人たる長男に教えているのだなど
と、わざとらしくいつていた。事實は、この人はあまりにも自分の実
権の維持に小心翼々として、当然全財産を譲らねばならない相続人た
る子にさえ、そんなことは教えるはずはなかったのだ。ただ一週に
二、三度スイスへ送り、そこからまたウィーンへ運ばれる十五ページ

から二十ページの公文通信を書くのを手つだわせていただけのことだ。そうやって、イタリア王国の内部情勢を、彼のいわゆる正統の君主たちに知らせるのだと称してはいた。じつは、そんな内部情勢など彼は知っていたわけではないのだが、彼の書簡はなかなか成功を収めていた。そのわけはこうだ。侯爵は、ある腹心の部下を国道にやって、駐屯地を変えるフランスあるいはイタリアの何々連隊の兵員数を計算させ、その事実をウィーンの宮廷へ報告するときには、兵士の実数を四分の一も減少しておく。この手紙はばかばかしいものであったが、これが他のもっと正確な報告を否定する効果をもっていた。そこで侯爵はファブリスが館に帰るすこし以前、著名な勲章を授けられた。これは、彼の侍従の制服を飾る第五番めの勲章になった。じじつ、さすがにその書斎以外では、思いきってこの服を身に着けえないのは残念だったが、それでも、例の文書を口授するときには、ありったけの勲章をさげた緋取り服を、かならず着ることにしていた。そうしなければ礼を失することになると思っていたのだ。

侯爵夫人は、わが子のかわいい愛嬌に驚嘆していた。夫人は一年に二、三度、將軍A***伯爵に手紙を書く習慣をいまもつづけていた。これがロベール中尉のいまの名である。夫人は自分の愛している人々に嘘をつくのは大きらいだった。その子に質問をしてみて、あまりに何も知らないのに驚いた。

(このなんにも知らないわたしにさえ、無教育にみえるのだ、あれほど学問のあるロベールさんは、きつと学問などぜんぜんしていないと思うだろう。しかも、いまはなにか才能のぜひ必要なときなのに)。いまひとつ、夫人がこれと同じほど驚かされた特徴は、ファブリスがジェズイット派の僧侶たちに教えられた宗教上の事柄を、なにもかもまじめに考えていることだ。彼女とても信仰心をもっているが、この子の狂信者の態度をみると身ぶるのいすのだった。(もし侯爵がこの子のこういう弱点を見ぬくだけの頭のよさをもっていたら、きっと、わたしからあの子の愛をとりあげてしまいそう)。夫人はた

いそう泣いた。そしてファブリスへの愛情はつのるばかりだった。

三、四十人もの従者がいるこの館の生活はじつにさびしく陰気だった。ファブリスは毎日、獵をしたり、船に乗って湖上を漕ぎまわるかしてすごしていた。まもなく彼は御者や馬丁たちとすっかり親しくなった。彼らはみなフランス人の熱狂的な支持者で、侯爵や長男つきのありがたやの侍者たちを、おおびらに嘲笑していた。こういうまじめくさった連中を笑う冗談口の種にいつもなるのは、彼らがご主人たちをまねて髪粉をつけている点であった。

第二章

……金星あらわれ夕影われらにせまるところ、
未来にあこがれ、われ空を眺む。
空には神明らかなる微をもて、

生きとしけるものの運命を書きしるしたまえり。

天空深きところよりひとり人間の人間を見やりつつ、

しばしば憐みふかく道をおしえたもう

神の文字たる星により、

よきあしき事柄をわれわれに告げたもう

されど土と死を負える人々、

かかる文字をさげすみ読むことなし。

ロンサール

侯爵は知識にたいするはげしい憎悪を公言している人だった。イタリアを滅ぼしたものは思想であるといっていた。教育にたいするこの頑固な恐怖と、その子ファブリスがジェズイット学校であんなにりっぱにはじめてきた学問を完成させたいという希望をどういうふうにか調和させたいか、それがよくわからなかった。最も無難なやりかたとして、グリアンタの司祭の善良なブラネス師に頼んで、ファブリ